

「次代を担う支援者養成研修（令和6年度）」実施報告

8月3日から10月6日にかけて「次代を担う支援者養成研修」を開催し、29名の方が受講されました。

本研修実施にあたって

本研修を実現できたのは、悩みがあってもだれにも相談することができず、帰る場所さえ見失ってしまった子ども・若者たちを支援している、本研修の講師をお引き受けいただきました団体様の圧倒的な熱意によるものです。

不登校・ひきこもり支援を目的とするアウトリーチ研修は国を始め他県でも行われているところもあります。しかし、4団体が自主的に講演及び実地研修を協働して実施する事例は確認できず、実地研修だけでなく講演も実践に基づいた非常に貴重な機会になっていると考えています。これだけ実践に基づいた研修は他に類を見ないものになっていると自負しております。

困難を抱える若者の増加が課題であると同時に、その支援者の養成も社会的課題とされています。

子ども・若者の支援にかかわることを目指す参加者の皆様方が、困難を抱える子ども・若者への支援に関する理解を深めるとともに当事者性を高めて、将来の支援者として、気づき・つながり・寄り添い・信頼関係を築く実践力の向上を図り、少しでも子ども・若者たちの未来が明るくなってほしいと願っています。

愛知県生涯学習推進センター センター長 伊佐治 進

参加者	講演	1日目	28名、	2日目	24名
	実地研修		18名		
	全体交流会		17名		

講演Ⅰ 「支援のあり方～子どもとの寄り添いとは～」

NPO 法人陽和 理事長 渋谷 幸靖 氏

【内容】

引きこもり、発達障がい、不登校の子ども達、少年院や鑑別所を出た少年達に寄り添っている。様々な背景の中で育ち、居場所がなく、否定ばかりされ、社会の枠から外れてしまった子ども達の可能性の蓋を開けてあげ、どんな子でも「絶対にできる」と信じながら子ども達に寄り添う活動を続けている。

「陽和」のスローガンは「どの子ども大切に」。

否定ばかりされ、心に余裕が無い子どもに正論を言っても、自分を否定されたと感じてしまう。困難を抱えた子供は被害者性を有し、心の防衛反応として認知の歪みを抱えている場合がある。そ

のため、心のカギを開けることが重要であり、本音で話せる関係を築いて寄り添うことが肝要である。子どもと同じ目線、同じ価値観で寄り添い、相手の場所と同じ場所に立つことが大切である。

【参加者の声】（一部）

- ・ 支援者の心持ちについてよく分かりました。そして子供たちの特性をしっかりと理解して、心のとびらを開けられるように子供たちに接していきたいと思います。
- ・ 一人ひとりへの理解の大切さを学ぶことができました。背景を知るために、相手を知るために自分がどう行動すべきか、考え続けたいと思います。
- ・ 学校の授業で子どもの問題に対して、「共感の目」「評価の目」の両方の目が大切だと学びました。しかし、今回の話で「同じ目線で同じ価値観で」上から目線にならずに、相手が心を開くのを待つと聞き、「共感の目」をもっと大切にしていけるべきなのだと感じました。
- ・ 非行や引きこもりを起こすのは、問題のある人ではなくて、本人も苦しんでいて、困る問題を抱えている人であると思います。相手のことを思った行動をしても、伝え方や今までの関係性によっては受け取って貰えない場合があり、その際に第三者の支援者の立場で手をとって貰える人になりたいと思いました。
- ・ 自分では常識であると感じることであっても生きづらさを抱える子にとっては大きい壁に感じるものがよくあり、自分の心のキャパとその子の心のキャパが同じであると考えてはいけないということが大変印象に残りました。心の余裕がない時、イライラしてしまうこともあるが、それを受け入れ理解する支援が必要不可欠であると感じました。

講演2 「街角保健室の挑戦 ～ピンクテントの灯は安心安全自由への道しるべ～」

街角保健室☆ケアリングカフェ 代表 中谷 豊実 氏

【内容】

高校の保健体育の教員として性に関する教育に携わる中で、県内高校生を対象とした調査から合意のない性行為などが相当数あるという実態がみえていた。そこに、コロナ禍で若年女子の自殺率が高くなり、経済的、社会的にも女性の状況が悪くなっていき、何かしたいと、夜の繁華街にある公園で若年女性の居場所、相談の場を提供する活動を始めた。

同意のないあるいはリスクの高い性行為、デートDV、ホスト依存、虐待など様々な問題を抱える若い女の子がいる。相談の看板を掲げても自分から相談に来る子はいない。まず、声をかけ、会話をし、こちらから会いに行くアウトリーチが重要である。相談に対応する産婦人科医などのスタッフがいるが、女の子たちが興味をもってくれる仕掛けやほっとする空間を作ることが重要である。

ボランティア活動を続けるモチベーションは、喜んでもらえる嬉しさ、役に立っているという実感といった自己肯定感であり、相互の豊かな関係性である。性においても同様に、互いを尊重しあうことで、大切にされているという自己肯定感が生まれ、自分を大切にすることに繋がる。また、性とは、愛を受け取っていく行為や体験であり、性教育とは、自分を守る防犯の知識であり、「性の健康と人権・命の安全教育」なのである。大事なことは、自分を大切にすること。

【参加者の声】（一部）

- ・ 自己肯定感、自分を大切にすることの大切さを改めて気づかされました。

- ・子どもの性教育について必要なものであると感じています。少しずつ子どもたちが心と身体を大切にすることを話していきたいと思いました。
- ・性教育の話題はこれまであまり意識したことがなかったのですが、こういった観点からの若者支援について改めて考える機会となりました。
- ・印象に残っていることは、自分に弱点があっても何か1つ特別できることがあれば、弱点が生きづらさとなっていたとしても、周りから受け入れられるということです。そのため、支援する時、その子の得意なことを存分に褒め、自信にできるようサポートする必要があると感じました。
- ・「誰かを大切に思う気持ち」の大きさを感じました。また、(正しい)情報をどこから入手するのか、多くの人を知ることの重要性も理解することができました。

講演3 「すべてはひとり一人の未来のために」

一般社団法人愛知 PFS 協会 代表理事 星野 智生 氏

【内容】

これまでの支援の問題点や支援のあり方を交えながら、愛知 PFS 協会の事業を紹介。

多くの支援現場では、「あなたのために…」という名目のもとで、支援者を始めとする関係者が子どものいないところで話し合い、すべてを決めてしまうというケースが見られ、それがかえって、子どもが抱く他者や社会に対する不信や警戒心を一層強くしてしまうことがある。愛知 PFS 協会では、子ども自身も参加して、子ども・家庭・支援者が一緒になって、その子に合わせた方法を考えていく。子どもの声に耳を傾け、「その子にとっての最善の方法は何か？」という問いに向き合い、寄り添い続けることで信頼関係を築くことを大切にしている。

その後、あらためて「子どもの声を聞く」とはどういうことかをテーマに、グループワークを行った。

【参加者の声】(一部)

- ・「子どもの話を聞く」について他者の意見を聞き、自分にはなかったさまざまな視点を見つけることができ、とても良かったです。
- ・ワークを通じて、学生だけでなく、市役所の方や現職の先生など、他の参加者の方の言葉を聞き、いろいろな考え方を知ることができ、勉強になりました。
- ・「子どもの声を聞く」、改めて言葉にすることで、再度意識して子どもたちに関わっていきたいと思いました。
- ・地域で行われている支援事業を知ることができて、子ども若者支援の中でさまざまな支援の仕方があることを学びました。また、ワークでは自分の気持ちや考えの整理、他者との共有ができて良かったです。
- ・聴いてくれる人、話しやすい環境、改めて考えさせられて、今一度心に留めることができました。

講演4 「『若者が若者の居場所をつくる意義』について」

NPO 法人全国こども福祉センター 学生ボランティア 加藤 早耶香 氏

【内容】

問題を抱えている若者に支援が届いていない、支援・相談機関に相談していない現状がある。

「アウトリーチ」については、福祉の分野のテキストにも記述が少なく、介入の側面が強いアウトリーチには、もともとあったコミュニティーを壊してしまうなどのリスクもある。だが、出会いやコミュニケーションを基にしたアウトリーチは、相談や支援に結び付いていない（相談・支援の輪からこぼれた）若者へのアプローチに向いている。

全国こども福祉センターは、若者自身が若者に声かけをするアウトリーチを行っている。メンバーや声をかけた若者との交流、声かけを受けた若者が、活動に参加するようになって声かけをする立場になることもあり、支援、被支援にとらわれない若者の居場所にもなっている。

若者が抱えた悩みにどんな言葉をかけるか、悩みの背景が見えてきたらどうするか、実際に声掛けのアウトリーチであった事例をもとに、グループで話し合いを行った。

子ども・若者に係わらず、困っている人一人一人に目を向けて、みんなで福祉に参加して欲しいと発信し続けることが大切である。

【参加者の声】（一部）

- ・若者たちの現状、「居場所」は絶対的に必要です。大人が作ったところではなく、若者がつくるのが大切です。改めて気づきました。
- ・「子どもが子どもに声をかける」同世代の支援は大変心強いし、未来に明るさを感じました。
- ・若い方が中心に活動されている事が心強く、素晴らしいと思いました。ワークも同じグループの方々と楽しくさせて頂き、支援は人と人のつながりなんだよなあと改めて感じさせて頂きました。
- ・アウトリーチについて知らないことが多かったので、知ることができてよかったです。
- ・事例をもとにグループワークをさせて頂き、意見を出し合いながら学ぶことができました。
- ・グループの話し合いで実際に活動をしていたり、関連の職に就いていたりしている方々の意見を知ることができた。貴重な経験になった。

実地研修

講師の各団体の活動に参加していただきました。複数の団体の活動に参加された方も多くいらっしゃいました。

全体交流会

実地研修参加者による実地研修の感想や今後の活動についてお話いただき、各団体の講師及び県関係課（社会活動推進課・あいちの学び推進課）担当職員からもコメントをいただきながら、参加者同士の交流をしました。

【参加者の声】（一部）

- ・自分の参加した実地研修以外の研修の内容について詳しく知ることができ、またそれぞれの人が自身の経験から何を感じたかを知ることができたという点で、多様な考えを知る良い経験になった。
- ・皆さんそれぞれ熱い思いをもって実地研修に参加されたことがお話から伝わってきて、伺えてよかったです。
- ・自分自身の学びや感じたことをお話し、他者の考えや想いを聞くことができ、とても有意義な時

間となりました。

修了証

すべての研修に参加された14名に修了証を授与しました。

【研修全体についての感想】（一部）

- ・自分が想像していたものや本で得た知識を超える現実と声を知れた。また他のボランティアや研修に参加して、新しい学びを得ようと思った。
- ・参加する前のステレオタイプな自分の価値観が変わり、よい傾向だと思いました。
- ・大学生などこれからの支援を担う若い世代の方とご一緒できる貴重な機会でした。
- ・支援者として子供たちに寄り添って気持ちの変化を適切に理解できるように努力していきたいと思います。
- ・どれだけ多くの経験値のある先生方であっても、支援には毎回悩む、本当に良かったのか落ち込む、支援の答えなんて分からないと思うと仰っていて、現場を経験しながらもずっと良い支援というのを考え続けていくのが大切だということを学び、気づかせてもらいました。

【修了書授与者の参加報告】（一部抜粋）

・実地研修では、自分が思っている以上に子ども・若者支援の現状は難しいものだと感じました。講師の先生方の話をお聞きしたうえで実地研修でしたが、お聞きしていてもやはり現場に行くと新たな気づきや学びがありました。“どうしたらいいんだろう”をみんなで考え、実際に行動することで一つひとつクリアにしていく必要があり、それには支援者の知識も必要で、多くの時間もかかることを実感しました。だからこそ、コツコツと関係性を大切にしながら関わり続けることが重要だと感じました。今後も活動に参加させていただきながら、自分自身も学びを深めたいと思っています。(K)

・人間同志信じ合うことの大切さ、信じられることのうれしさ、頼りにされ人の役に立った時にありがたいと感謝された時のすがすがしさ、一つずつ体験し直すことができる居場所、仲間が必要であると思いました。自分も信頼できる大人として、この先生生きていきたいと思いました。(K)

・子どもと関わる際、ゴールを求めすぎてしまうところがありました。でも、まずは安心できる環境にすることが何よりも大切であると知りました。無理に子どもに聞くのではなく、子どもからなんでも話していけるような、信頼関係を築けるようになりたいと感じました。カミすぎず、誠実に接していこうと思います。(M)

・世代間の考え方の違いは、アンコンシャスバイアスに囚われていることで生じていることが各支援団体の支援者の方と話しをすることで強く感じました。思いやりを持って、時間をかけて接することで、気持ちの機微をしっかりと捉えることに努めたいと思います。そうすることで、若者の気持ちを考えた問題解決の方法と一緒に探れることができることを忘れずに、一人の支援者としての立ち位置を確立できるように、若者たちとの日々の接し方を改善していきたいと思います。(Y)